〈特集2〉車いすプロアスリートを直撃！

廣道純選手インタビュー＆大分国際車いすマラソン大会

今号の表紙にも登場していただいた車いす陸上競技界のプロアスリート廣道純選手に、国際文化学科2年の河野由芽さん、木数守さん、出口英さんがインタビューを行いました！

―車いすの競技に出場しようと思ったきっかけはなんですか？

出場しようと思ったというよりも、始めようと思ったのは、入院してた時のリハビリの先生のアドバイス。リハビリってすることがなかったんよ。背骨がひっついて、動けるようになった時から車いす自分で乗れてたし、体操やってたから、手の力がもともとあって。だから普通は車いすに乗るための訓練をしたり、バランス感覚を養って…ていうのもすべてできてしまってたんで、病院ですることがない、いう時に病院の先生が「車いすでもスポーツができるから見学に行こう」とスポーツセンターに連れて行ってくれて。それでみんなが走っている姿を見て「あ！おれ、これやる！」って。退院するまでの間、体を鍛えるために先生はそういうスポーツの世界を見せてくれたんやと思うけど、そうやってスポーツができるっていうのが分かってからは、8月くらいに陸上を始めて、初めて大会に出たのが年明けて3月のハーフマラソンで、4月にはフルマラソンに出場してた。だから「大会を目指して頑張るぞー」とかそんなんは特になくて、陸上やりだしてその距離が走れるようになったから出場したっていうカンジ。

―ホームステイをされた際に苦労したことはありますか？

苦労…う～ん。苦労はしてないかな。

―英語とかは？

英語は、ある程度しゃべれるようになってから行ったから…。ホームステイする前、最初に世界チャンピオンに出会う時も「会いたい！」と思ってボストンまで行って、すんなり苦労せず会えたし、会って声をかけたら、名刺くれて「連絡してこい」ってなって。だからホント苦労せず、ポンポンと勢いで全部うまくいって…。出会って1年くらいしてから、家に呼ばれたんやけど、最初に出会った時に「英語を勉強しよう」と思ってたから、そんなに困ることもなかったな。

―これまでに数多くの素晴らしい成績を残されていますが、その成績を残すための努力とかを教えてください。

基本、最初の入り口は「楽しいな」と思ってやりだして、楽しいから練習する。練習すれば速くなる。人よりも速く走ることが楽しいからもっと練習をする。どんどん人よりもたくさん走る。っていうのを繰り返していったら、またまた結果が出た。っていうような感じで、やっぱり勝つために何かをやっているというよりは、楽しむためにやっていたら、結果が速くなった。という方が強いから、これまた苦労してないんだわ（笑）。好きなことを楽しんでやっているから「練習が嫌やな」と思ったことはないし、「レースをやめてしまいたい」と思ったことはないし、負けた時も、負けた時に感じる悔しさであったりとかを楽しんでいるから、「あ～悔しいなあ。速い奴がおったんや」「よし！じゃあまた次頑張ってアイツに勝とう！」みたいなのが、次の試合に向けての練習になったりっていうので、ホントに22年間ずっと楽しい。

―22年間、続けてこられたのは、何か支えとかがあったのですか？

22年間、続けることが大変なことやったら、何か支えがいるんやけど、大変じゃないから、支えは基本ない。日常のどんなことにおいても、支えられない、支えられたくない。自分で支えてるから。もともとそういう性格。人に支えられるっていうタイプではないね。「人を支えたいな」と思うことはあっても、誰かに頼ったりっていうのは嫌いやから。「一人で生きてってやるぜ！」的な（笑）。

―今後の目標ってありますか？

まだ金メダル獲れてないから、パラリンピックでの金メダルっていうのは次のリオでも狙うし、リオの次の東京でも狙うし、おそらく年齢的には東京の次、2024年くらいまではフツウにトップで戦えるやろうし、環境さえ今の状況で走れる環境が続けば、ハインツが55歳でトップでやってるっていう目標があるから、最低でもそれくらいか、60歳くらいまで。あと子供が今まだ下の子が0歳だから、あと20年間はトップでやり続けられたらいいなと。その間ずっと世界一を目標にやり続けるというのが目標かな。

―車いすマラソン大会の学生ボランティアについてどう思いますか？

学生に期待することというかね、ボランティアになって「何かをする」とかそういうことよりも、まずはやっぱりレースを見たり、いろんな世界中から集まってくる選手達を見て、そういう選手たちがどんな風に競技に参加して、どういう動きをしてるのかっていう細かいところまで見てほしい。おそらく何も知らずに。車いすマラソンのスタッフに！っていう人たちは、「障がい者がやっているスポーツ」「何かをお手伝いせないかん」ていう風に思うかもしれへんのやけど、たぶん手伝いが必要な選手って俺の中では誰ひとりおらん、ぐらいに思ってるねんね。それくらいみんなはアスリートやし、できて当然のことなんやけど、知られてないことで「障がい者はかわいそう」とか「障がい者は人よりも劣ってる」それで、「手助けが必要や～」っていう風に世間一般的には思われているのを、こういう大会を通して「そうじゃないんや」っていう事を、多くの人に知ってもらいたい。そして、その感じたことをできるだけ多くの人たちに伝えていってもらいたいな、と思います。

芸短フェスタ2013
「大分国際車いすマラソン交流イベント～廣道純選手の挑戦～」を開催しました！

「第33回 大分国際車いすマラソン大会」出場目前となる10月18日、芸短フェスタイベント「第4回 大分国際車いすマラソン交流イベント～大分から世界へ、廣道純選手の挑戦」を開催しました。

講演では、車いす生活になった頃からプロアスリートとなった現在までのお話をされました。英語も分からないまま海外へ行き、車いすマラソン世界記録保持者の元へ弟子入り志願したり、突然会社を辞め、保証もないプロの道へと進むなど、行動力あふれるアクティブ人生に聴講した方々も興味深く聞き入っていました。

最後に、「この競技と出会ったおかげで、車いすの人生がバラ色に変わった。自分が障がい者であるっていうことを感じる必要がないくらいになんでもできる。努力すればどんな人間にでも必ず、チャンスはやってくる！というのを、「大分国際車いすマラソン大会」を通して感じていただければと思います」とメッセージを送ってくださいました。

Profile

廣道 純（ひろみち じゅん）

1973年12月21日 大阪生まれ。1989年、高校1年の時にバイク事故で脊髄損傷により車いす生活となる。17歳で車いすレースの世界に入り、1994年、車いすマラソン世界記録保持者ジム・クナープ氏へ弟子入りを志願。彼の元で生活をしながら、トレーニング方法等を学び、アスリートとしての素質を開花させる。その年のボストンマラソンを皮切りに世界各国のレースに出場、数々のメダルを獲得する。「第33回 大分国際車いすマラソン大会」では、総合5位の成績を残した。

「第33回大分国際車いすマラソン大会」ボランティアスタッフレポート！

10月27日に開催された「第33回大分国際車いすマラソン大会」に、ボランティアスタッフとして参加した学生からレポートが届きました！

私が担当になったフィリピン人のハロルドさんは、陽気で明るい性格でレース前日も楽しそうに仲間と話していました。しかしレース本番、すごく緊張した姿のハロルドさんがいて「どうしたの？」と聞くと「手が朝から痛んでて、それが気になって。でも、諦めず頑張ってみる」と話していました。そして、レース開始を見届けたあと、私はゴール地点の陸上競技場に向かいました。すると、途中リタイアしたハロルドさんが泣きそうな顔で私を待っていました。「I－m sorry」を何度も繰り返し、辛そうにしているハロルドさんに、私は何か伝えてあげたかったのですが、それを英語で伝えることができず、ただ背中をさってあげることしかできませんでした。その後、ハロルドさんはずっとゴール前で次々とゴールする選手たちを「生際命声を張り上げて応援していて、その姿がすごく印象に残っています。本気で一位を目指している選手、それぞれの思いを持って走っている選手、ただ楽しむために走った選手がいたけど、どの選手も本当に輝いてみえました。私はこの活動を通して、いろんな体験、いろんなことを学ぶことができました。英語が伝わらなかったり、聞き取ることができなかったりもしました。しかし、シンプルだけど、言葉が通じなくても自分が伝えようとすること、相手の話をちゃんと聞くことが大切なんだ、と改めて感じました。この思い出は決して忘れることはない大切な思い出。来年、また彼らに会う時まで、語学力をもっと身につけ、成長した私になっていたい、そう思います！

国際総合学科1年　朝光萌梨

英会話力の足りなさはもちろんですが、メインの選手のサポートもまだまだ力不足だったなと感じました…。しかし、選手と話すことでもっと英語を勉強したいって、気持ちは増しました。何よりも選手が全力で車椅子マラソンに挑んでいる姿を見て「選手がこんなにも頑張っているのに私が頑張らない訳にはいかない！」という気持ちがとても湧いてきました！この気持ちを忘れないうちに、行動にうつしていきます！とても良い経験が出来て私は幸せです！

国際総合学科1年　柳田真智子